

# 六反田遺跡現地説明会資料



平成19年(2007)12月23日(日)  
(財)滋賀県文化財保護協会

# 古代の物流ターミナルを発見 - 六反田遺跡の発掘調査成果から -

## キーワード

陸路と湖上路の接点 物流のターミナル 役所的な性格

## 1. 六反田遺跡の概要

六反田遺跡は、これまで古墳時代から平安時代までの遺物の散布地として周知されていましたが、今回中山間地域総合整備事業（鳥居本西部地区）にともなって6月から7月に事業対象地内において試掘調査を行ったところ、縄文時代の落ち込み（川跡？）や奈良時代の川跡、ピット等が確認されました。そのことから、対象地域内に縄文時代・奈良時代から平安時代を中心とした時期の集落が存在していたことが明らかになり、発掘調査を行うことになりました。

調査地は入江内湖に流入していた矢倉川が形成した扇状地の扇端部から氾濫平野に立地しています。入江内湖は、すべて干拓されていますが、地割などからJR東海道本線より南側まで入り込んでいたことが窺われ、当遺跡は矢倉川と入江内湖を通じて琵琶湖と繋がっていたものと考えられます。

調査地の500m東側に近世の中山道鳥居本の宿場があります。この鳥居本宿を500mほど北上すると、平野の縁辺部を通過していた街道が右に大きく折れて摺針峠に向かいます。当遺跡の立地する扇状地はこの東国へ抜ける中山道が近江国での最後の平野部になります。中山道は近世になって設置されたものですが、古代の東山道もこの扇状地内を通過していたと考えられます。また、南側には石田三成が関ヶ原の合戦で東国をおさえるために居城として整備した佐和山城があります。これらのことから、当地は早くから交通の要衝であった地域といえます。それは、琵琶湖と山地が迫っている位置関係上、陸路で東国から畿内地域に移動するときには必ず通過しなくてはならない「ゲート」的な性格をもった地域とも言い換えることができます。

その位置から今回検出された河川跡は、入江内湖を経て琵琶湖へ繋がっていることから、河川を利用した湖上交通と陸路の東山道との結節点に設けられた人や物資の集まるターミナルに相当する遺跡の可能性ができました。

## 2. 検出された遺構について

発掘調査で検出されている遺構で特出する時代は、縄文時代後期と平安時代（9世紀～11世紀）の2時期あります。

### 【縄文時代】

ピット群 - 調査地全体で多数確認されています。主に直径15～30cmの大きさの穴

です。調査地は、近代以降の基盤整備によりかなり削平を受けていることを考え合わせると、竪穴住居や平地式住居の住居跡になる可能性が高いと考えられます。

**埋甕** - <sup>うめがめ</sup>ピット内に深鉢を埋めたもので、3基検出されています。下半部の欠損や底部に穿孔が認められます。一般的に埋甕とは、主に竪穴住居の入り口部分の床面下に土器を埋設したもので、出産や新生児の成長祈願した呪術的な要素で理解されています。

**落ち込み** - 調査区4で確認された約15×2.5mの半円形に検出された落ち込みで、調査区の西側に広がる川跡の一部と思われます。そこからは、縄文時代中期末から後期前半(4000～3700年前)の土器と石器が大量に出土しています。

#### 【平安時代】

**掘立柱建物** - 全部で13棟みついています。調査区3・4からは主に6間(9.6m)×3間(4.8m)【建物2】、4間(6.4m)以上×2間(3.2m)以上【建物5】、5間(14m)×2間(5.6m)で4面廂の建物【建物1】、2間(3.2m)×2間(3.2m)【建物3】の掘立柱建物が検出されました。建物1の柱穴から緑釉陶器が出土しています。

調査区5からは、2間(3.2m)以上×2間(3.2m)以上【建物11】、4間(6.4m)×2間(3.2m)以上【建物12】の2棟が検出され、建物12では柱穴に柱材が残っていました。

調査区6からは主に4間(6.4m)×3間(4.8m)【建物8・10・13】、1間(1.6m)以上×3間(4.8m)【建物9】が検出されています。

**柵** - 調査区4・6から柵列が検出されました。それぞれ方位を建物に合わせている様子が窺われます。

**川跡** - 調査区6の2地点でみついています。北側の川跡1は、当該地周辺の地形から谷地であった可能性があります。両川跡の堆積土中から、縄文時代の土器・石器および7世紀後半から9世紀代の土器が出土しています。このことから、河川跡は縄文時代以降平安時代まで長期にわたり河川として機能していました。河川の周辺の低地部に薄い包含層が広がっていることから、たびたび氾濫していたことがわかりました。

その中で9世紀代の遺物を大量に包含している川跡2が幅約8mの規模を持つことが確認できました。これは、他の層には遺物がほとんど包含されていないことから、自然の河川を人工的に拡張するなどの整備を行って、水路として利用していた可能性が考えられます。そして、この層は川の西側に広がる<sup>びこうち</sup>微高地に沿って検出されていることから、出土する土器等は居住域から投棄されたものと思われます。出土している遺物は「律令様式」とよばれる都で使用されていた土器群と非常に類似していることが特色です。また、土

器の中には、漆が付着した土器や漆器椀、椀形滓と呼ばれる鍛冶の際に出る鉄滓が出土していることから、漆工芸や鍛冶を行っていた作業場が存在していたと考えられます。また、墨書土器や円面硯(専用硯)・転用硯(食器を硯として転用したもの)、燈明皿等も出土しており、文字を使用する施設や人々が存在したことを物語っています。

### 3. 遺跡の性格について

#### 【縄文時代】

六反田遺跡の周辺にあります縄文時代の遺跡は、早期後葉の磯山城遺跡、前期の入江内湖遺跡、中期の筑摩佃遺跡、後期後半から晩期の松原内湖遺跡があり、それぞれの時期に人々は活発に活動していたことがわかっています。当遺跡は、ちょうどこれらの遺跡の空白期間である中期末から後期前半に、集落の活動時期があります。先にあげた遺跡は、松原内湖、入江内湖の両内湖とその間に位置する磯山・弁天山の周辺に所在しており、六反田遺跡も内湖を中心とした生活圏のひとつとして認識できます。

上記の遺跡は主に内湖などの沼沢地や自然流路に所在し、直接的な生活遺構が確認されていない中、六反田遺跡では住居の可能性が高いピット群や、それに付随する埋嚢、各種石器類などが確認されていたことは、入江内湖や松原内湖の岸辺に営まれた縄文時代の集落の様子がより具体的になってきたといえます。

#### 【平安時代】

平安時代の集落の時期幅としては、川跡2から出土している遺物の年代である9世紀代(平安時代前期)が中心となり、建物1の柱穴から出土している遺物の10世紀後半から11世紀(平安時代後期)までに相当します。みつかった川跡2の構造をみますと直角に近い角度で折れ曲がるなど河川を人工的に改変している可能性が高く、水路としての運河的な性格が想定されます。また、出土している文字を伴う遺物などからも、一般的な農村集落とは違った、都を中心とした中央との繋がりをもった、役所的な性格を強く感じさせます。

同時期の周辺遺跡には、「山家(やまやけ)」と書かれた墨書土器が出土した松原内湖遺跡や、製鉄遺跡であるキドラ谷遺跡があります。松原内湖遺跡は、松原内湖に面した弁天山西麓の谷部にあり、地形的に耕作ができないことから、内湖や琵琶湖に関係した生業の可能性があり、地理的に単独の集落ではなく当遺跡と連携した集落であった可能性もあります。また、製鉄遺跡であるキドラ谷遺跡では、製品を搬出するために、矢倉川を利用して琵琶湖の水運を使用したと考えられます。

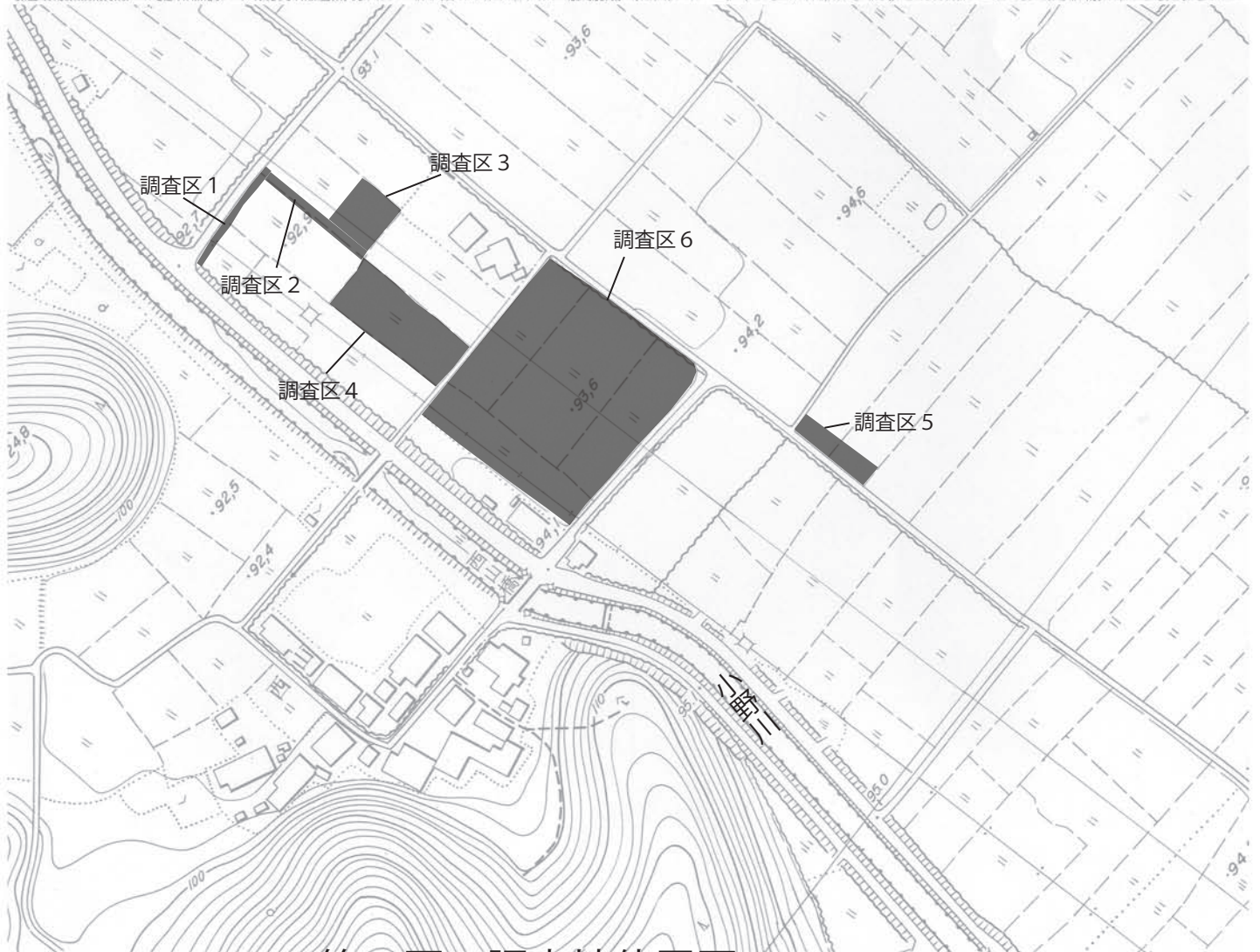
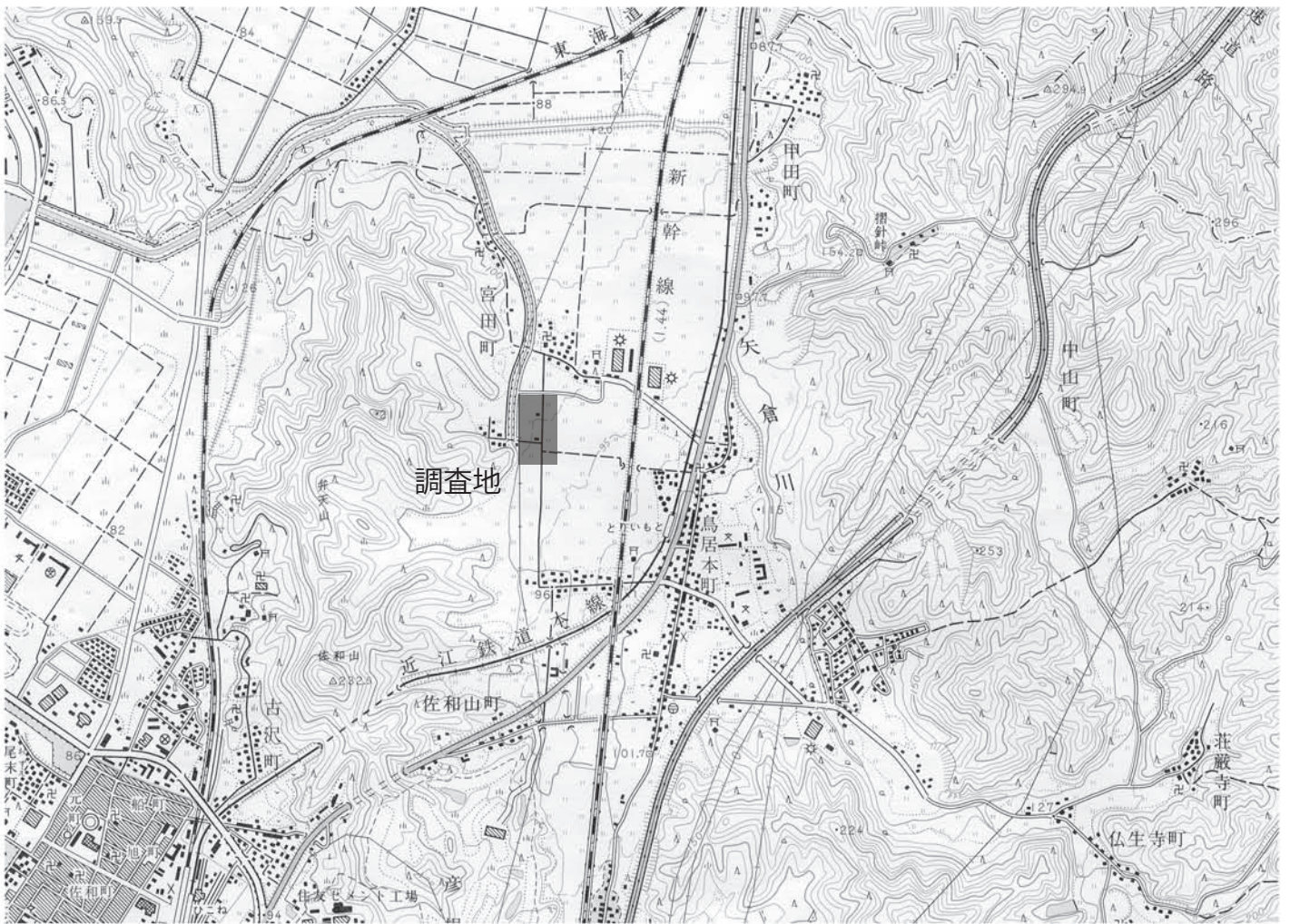
それらを有機的にみると、当遺跡の立地は陸上の交通路東山道と水上交通路の結節点にあたり、直接それを示す遺構・遺物は検出されていませんがその内容からも物資流通網の「ターミナル」的な性格を持っていた集落の可能性が考えられます。

#### 4 . まとめにかえて - 発掘調査の成果から -

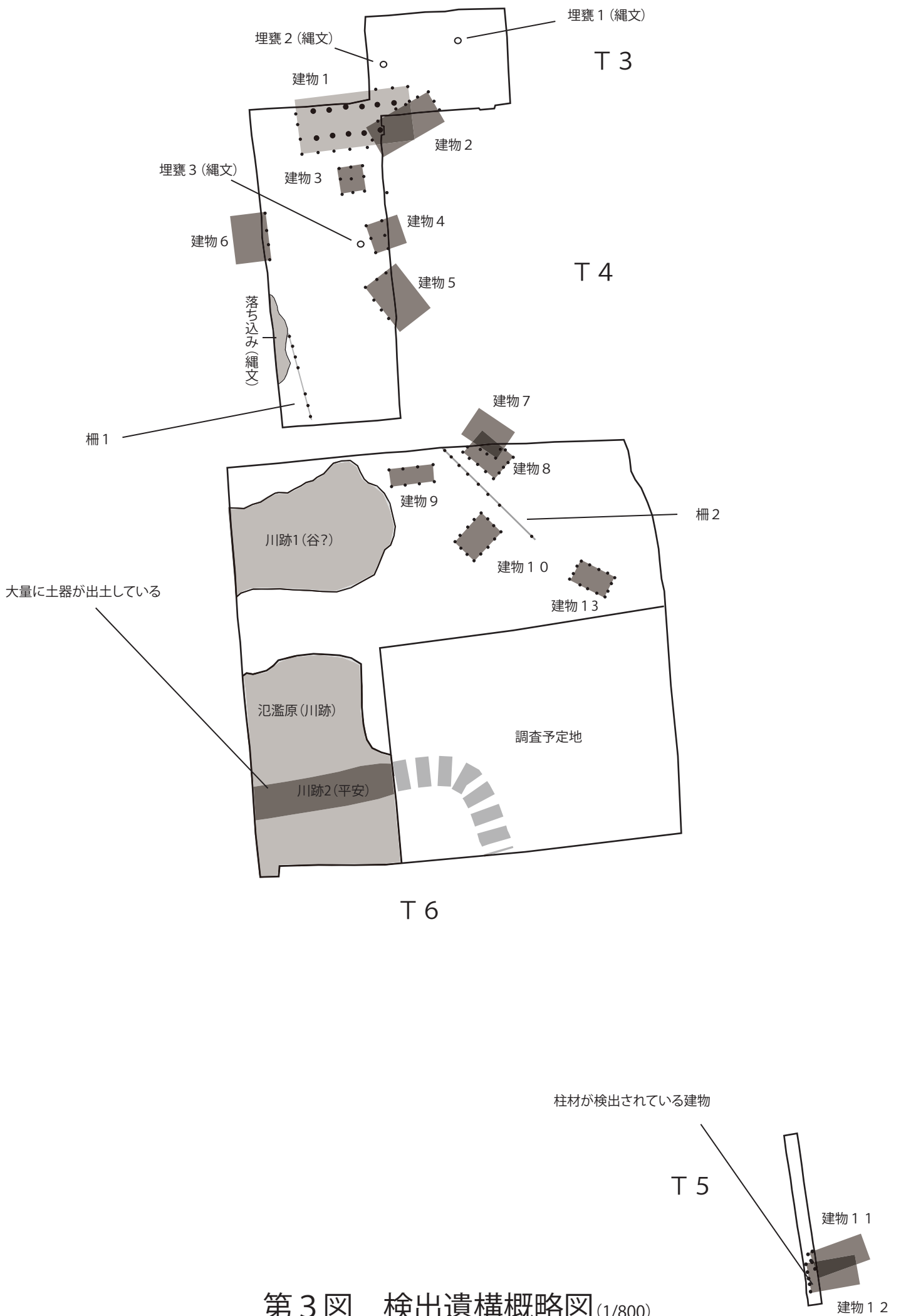
六反田遺跡が所在する彦根市の宮田町周辺は、現在も国道 8 号と東海道新幹線を望み、山を挟んで東海道本線・名神高速道路が集中して通過しています。その地理的な性格は、古代の人と物の主要な移動ルートとして存在した、「陸路 - 東山道と湖上路 - 琵琶湖の結節点」の一言に尽きます。東山道がすぐ脇を通過し、琵琶湖とは旧矢倉川を運河的に使うことにより入江内湖(筑摩江)と繋がり、アクセスができるという好条件に恵まれています。都から東山道(一部東海道)を使って近江国を通過する場合、琵琶湖との接点は、西の端にあたる大津のみですが、大津以北で琵琶湖に最も近くなるのがこの地域になります。河川を利用することによって、当時の港としての機能を担っていた内湖とアクセスすることのできる重要地点です。そのことは、東国から都を目指すときは、摺針峠を越えると最初に琵琶湖にアクセスできる地点となり、陸路から琵琶湖の水運に切り替える最良の地点となります。律令国家が整備されていく中で、物流の幹線が集中した土地として重要な位置を占めていったと考えられます。そのように考えれば、この地に何らかの中央政府の関与がみられるのも当然といえます。

一方、縄文時代には、内湖には、海(湖)の幸・山の幸の恩恵を受ける非常に恵まれた地域として繁栄しています。

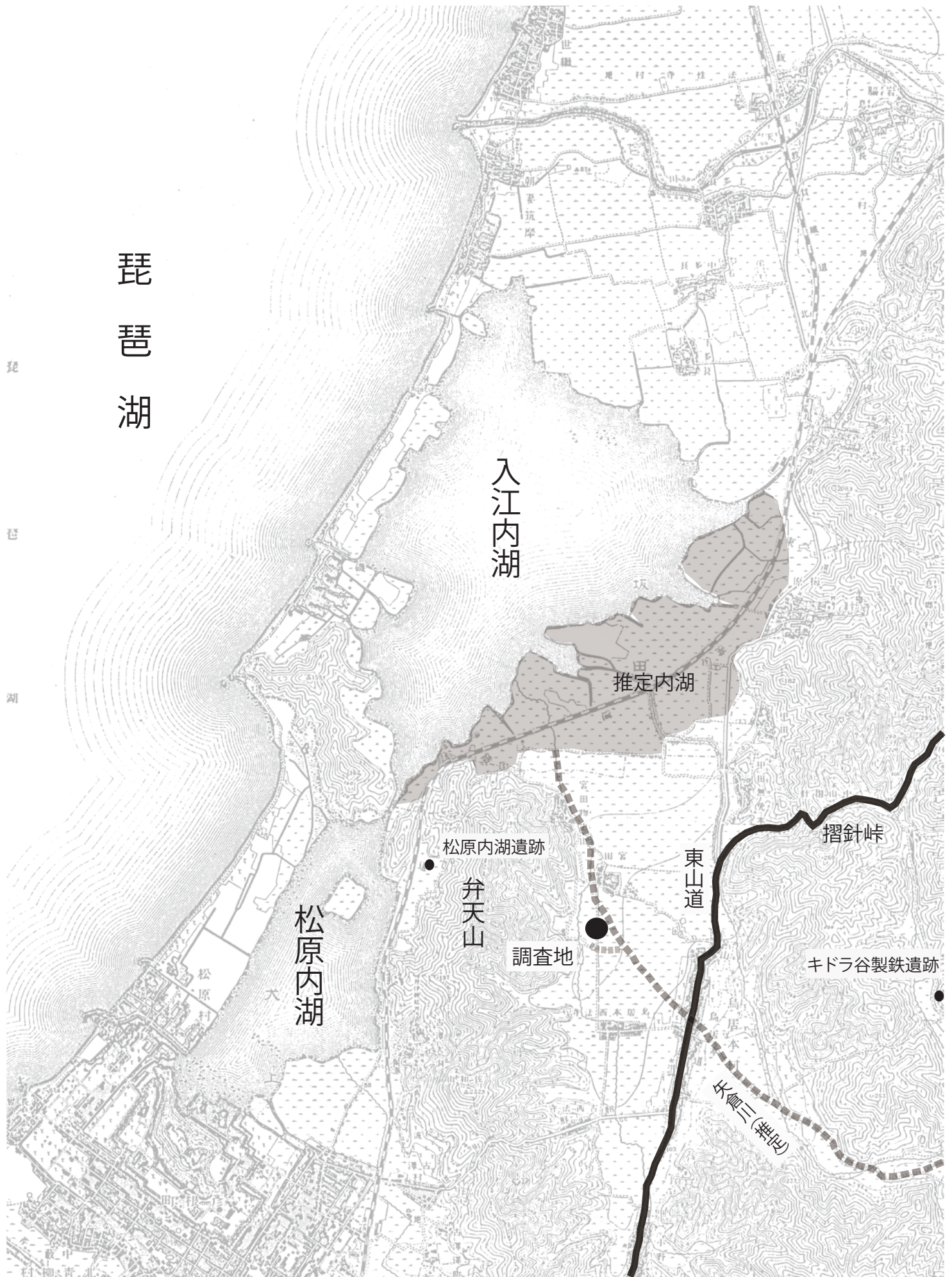
なお、現在調査中でありますことから、今後の発掘調査、さらには整理調査を通して遺物の内容が判明し、より具体的に、詳細に遺跡・地域の具体像を描くことが可能になると思われます。



第1図 調査地位置図(上:1/25,000 下:1/2,500)



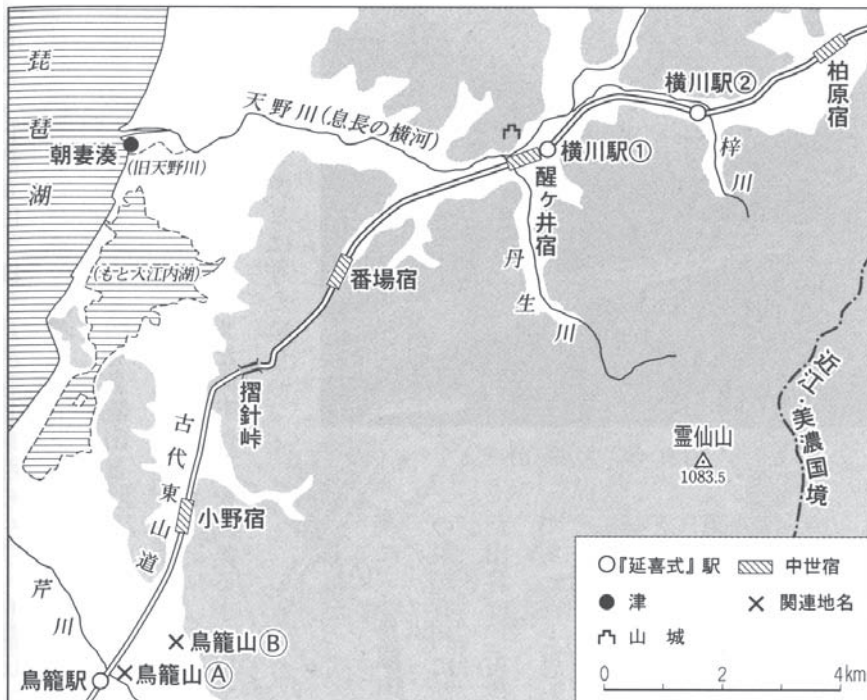
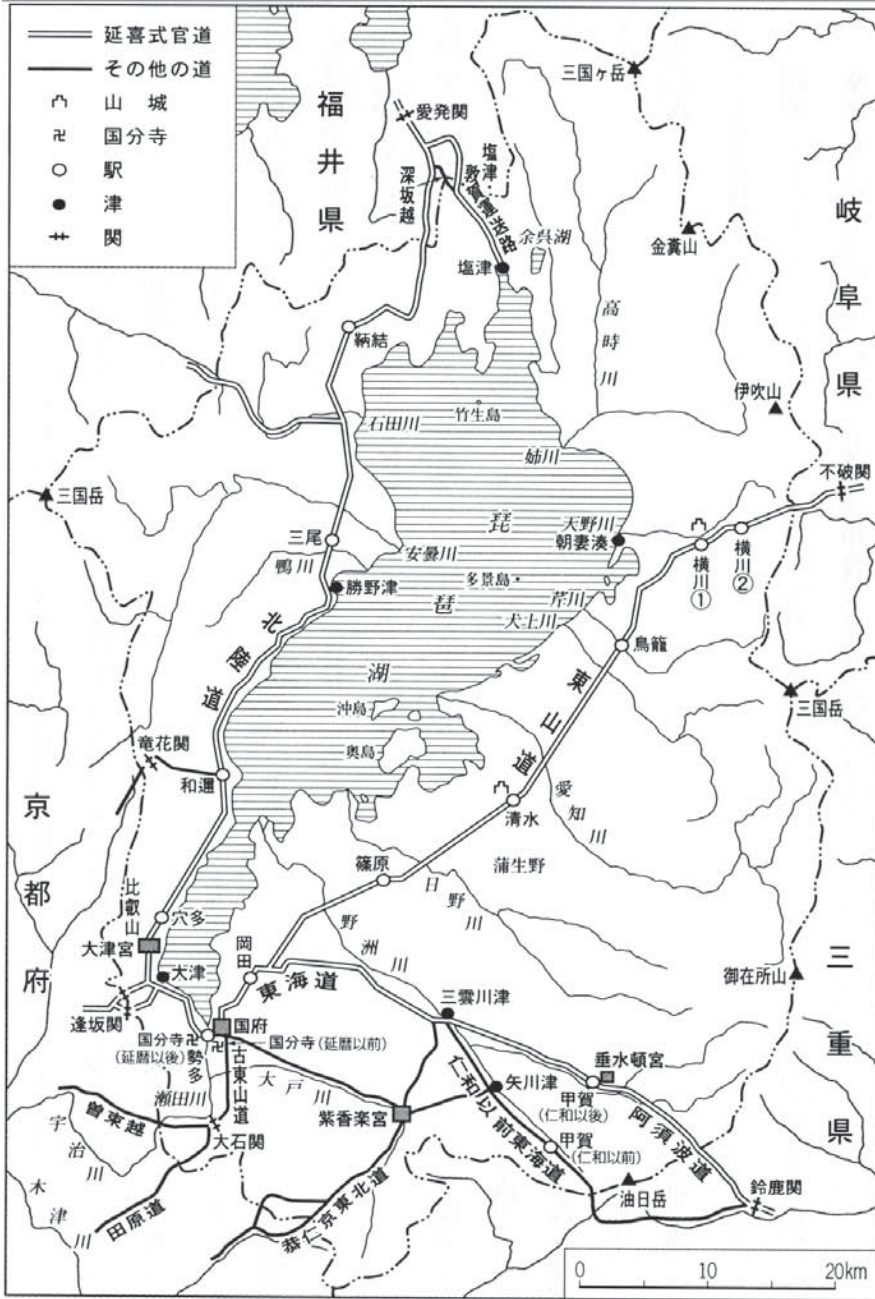
第 3 図 検出遺構概略図 (1/800)



第2図 調査地周辺復元図(明治28年・1/35,000)



参考資料



古代交通路（上）と周辺の駅と宿（下）（『新修彦根市史』2007より転載）